

金沢

Kanazawa Traditional Arts & Crafts

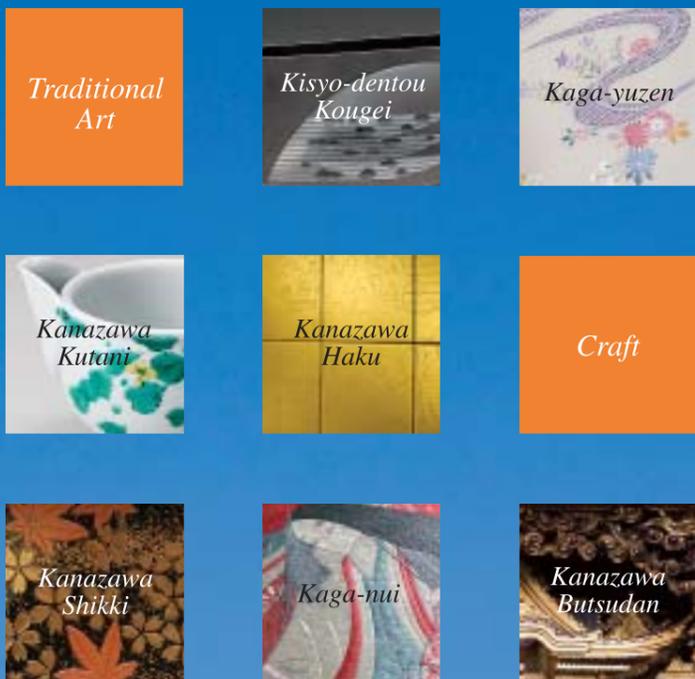
Autumn
2005
Vol.5

Kanazawa Traditional
Arts & Crafts

伝統工芸 &

現代アート

金沢。ふところ深きアートな街は、いま。



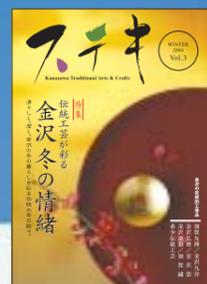
【ステキバックナンバー】



vol.1 創刊号
[2002 vol.1]平成14年11月発行



vol.2 金沢四季の意匠<秋編>
[2003 vol.2]平成15年9月発行



vol.3 金沢 冬の情緒
2004 vol.3]平成16年1月発行



vol.4 東京・大阪 百貨店
スタッフの工芸探訪
[2004 vol.4]平成16年9月発行

金沢の伝統的工芸品
加賀友禅 / 金沢九谷
金沢箔 / 金沢漆器
加賀繡 / 金沢仏壇
希少伝統工芸



【編集・発行】
金沢工芸普及推進協会

〒920-0962 金沢市広坂1-2-24 TEL076-265-3320 FAX076-265-3321
E-mail:hirosaka@blue.hokuriku.ne.jp http://www.hokuriku.ne.jp/hirosaka/

【編集協力】
協同組合加賀染振興協会・金沢九谷振興協同組合・石川県箔商工業協同組合・金沢漆器商工業協同組合
石川県加賀刺繍協同組合・金沢仏壇商工業協同組合
【取材・撮影協力】金沢市、金沢21世紀美術館、米岡家 【制作】ヨシダ印刷株式会社

「ステキ」のホームページを開設しています。ステキのバックナンバーをはじめ金沢の工芸について紹介していますが、まだまだ情報不足です。そこで皆様からの声を広く募集し、今後の活動に反映させていこうと考えています。どのような意見でも構いませんので、ぜひお寄せください。
<http://www.hokuriku.ne.jp/hirosaka/>からお送りください。またFAX・郵送でのお便りもお待ちしております。





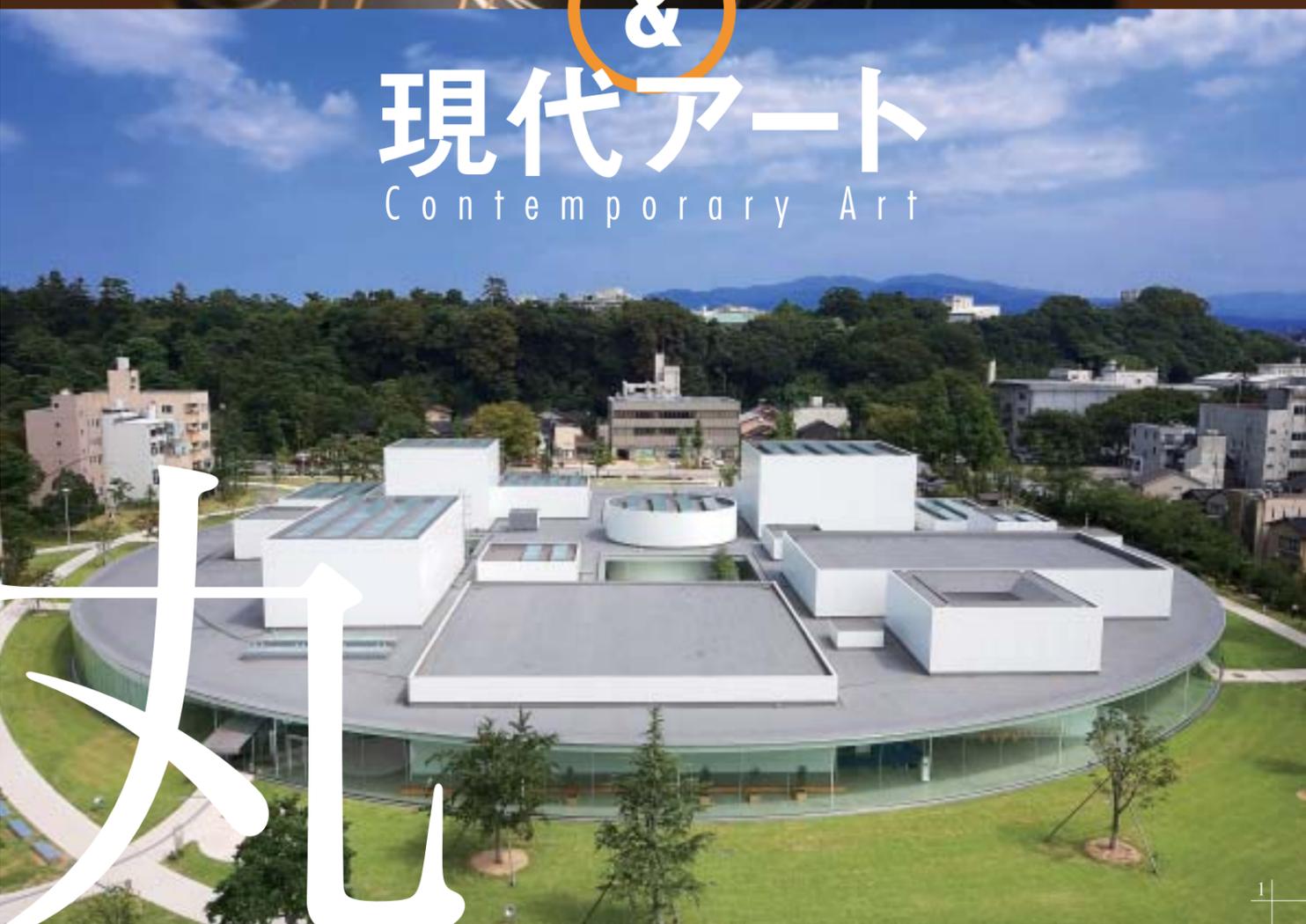
Traditional Arts & Crafts

伝統工芸

&

現代アート

Contemporary Art



今も昔も アートな街 金沢

Kanazawa Art

伝統工芸と現代アート。もちろんワールドの違いはあるのですが、私たちが金沢びとにとつては、どちらも感動を与えてくれるものとして、ことさらに違いを意識することは少ないように思います。

懐の深い街だと、ときに金沢が形容されますが、昨年の秋にオープンした「金沢21世紀美術館」もまた、そんな街のキャパシティの大きさを示すものの一つではないでしょうか。

金沢が古都や城下町というイメージを発信する時、そこには「伝統」というキーワードは必然的なものかも知れませんが、それほどこに「伝統」という言葉と寄り添ってきた街だからこそ、「伝統」なるものが決して昔ながらのものを、ただ守ることで受け継がれるのではないことを肌で知っています。

今も昔も、いや、これからもさらに、アートな街であり続ける金沢。この地に息づき続ける金沢の伝統工芸に、さらなるエールを寄せて頂けることを願って、(ステキ)第5号をここにお届け致します。

INDEX

3 技を人とともに招き、
自国だけでなく他国をも見つけ、
とことん懐を深く…。

5 「ステキインタビュー」重要無形文化財保持者 彫金・人間国宝 中川 衛氏
伝統を守るとか、伝承するのだから、
そんなふう考えたことはないですね。

6 「ステキインタビュー」金沢市助役/金沢21世紀美術館館長 蓑 豊氏
アート、工芸の分野を超えて、
はるか昔から美術は生活の中にあつた。

7 外国の人たちは、どう見て、どう感じているんだろう!?
金沢の伝統工芸

8 希少伝統工芸 誇りたいのは、希少であることではなく、
手わざの温もり。

9 加賀友禅 加賀友禅とは、キモノという
キャンバスに描かれた、まさに絵画なんだ。

11 金沢九谷 暮らしの中でちゃんと使えるのか、使ってもらえるのか、
使い手側を意識している金沢九谷。

13 金沢箔 金箔があり銀箔があり、さらには
プラチナ箔もあつて、金箔箔の奥は深い。

15 金沢漆器 瀟洒だとか、華麗だとか、そんな昔ながらの
アイデンティティに、ただ、とらまわつてはいない。

17 加賀 針を運ぶ指先、その動きにも
芸術性を感じさせる、加賀の妙。

19 金沢仏壇 やはり問いたいのは、宗派や寸法を
超えたところでの、確かな工芸美。

21 金沢伝統工芸ショップガイド



技を人とともに招き、 自国だけでなく他国をも見つけ、 とことん懐を深く...

例えば、焼き物や漆器の歴史は

紀元前にさかのぼることができます。

でも、いま金沢の伝統工芸を語るとき、

その起点として

加賀百万石の加賀藩があったことは

誰もが認めるところでしよう。

その象徴的なキーワードとしてあるのが、

そう、「御細工所」と「百工比照」なのです。

加賀藩の藩営によって

多彩な工芸の拠点としてあったもの、
それが、御細工所。

百万石の大藩としての加賀藩は、外様として徳川家に睨まれながらも、その延命を図る政策として、武ではなく文に、武芸ではなく工芸に力を注いだのだというのが広く言われていることです。

でも、その当初はやはり、武具の修理や補修という仕事をおろそかにすることなく、いざという時に備えていたのだと言います。そのために藩営で営ま

れていたのが御細工所。三代藩主利常の時代には、すでに武具の補修だけではなく工芸制作所として整備されていました。さらに五代藩主綱紀が、次々に全国から優れた職人や作家を招いたことが、金沢に多彩な工芸を根付かせる、さらなる礎となったのです。

全国の工芸品とその技を 比較対照できるよう集大成したものの、 それが、百工比照。

御細工所の職人たちは、その地位も高く優遇されていました。世襲が約束されたものではなく、町人であっても優れた技を身に付けた者は、試験を受けた上で登用されていました。

そんな技術本意で、かつ視野の広い姿勢は、百工比照にも見て取れます。それは、五代藩主綱紀が全国に多々ある金工、漆、七宝、組紐等の工芸品はもろろん、その技法を文字通り比較対照ができるようにと整理分類を重ね、自ら「百工比照」と名付けたもの。言うならば、工芸品の一大標本群であり、今でいうデザイン見本帳でもあります。

これらはまとめて重要文化財に指定され今に受け継がれているのはもちろん、金沢の伝統工芸に脈々と進取の気概を息づかせています。



⑤グレイソン・ベリー
【敏感な子供の誓約】, 2003

①~⑤写真提供: 金沢21世紀美術館

④パトリック・ブラン[緑の橋], 2004と、ヤン・ファープル[雲を測る男], 1999



③ヤノベケンジ [タンキングマシン], 1990



②草間 彌生 [自己消滅], 1963-74



①村上隆 [コスモス], 1998





ステキインタビュー 2

アート、工芸の分野を超えて、 はるか昔から美術は 生活の中にあった。

金沢市助役／金沢21世紀美術館館長 **蓑 豊 氏**

PROFILE 1941年石川県金沢市生まれ。慶應義塾大学文学部哲学科美学美術史専攻卒業。ハーバード大学文学博士号取得。アメリカ各地の美術館で要職を歴任。1996年に大阪市立美術館長、2004年に金沢21世紀美術館館長に就任し、その手腕が高く評価されている。2005年4月より金沢市助役。

私は、二十数年にわたってアメリカの美術館に関わっていましたが、日本のいわゆる美術館とは基本的に成り立ちが違います。日本では、何かお宝を大切にしまつておいて、ときどきお披露目するみたいところがありますが、アメリカでは美術館そのものが美術教育の現場として機能しているのです。

20年後30年後が楽しみだ。
アートを感じた子供たちの、

「ここ」と「からだ」で感じることの大切さは、現代アートに限らず伝統工芸も同じだと思います。もともと金沢にあった、伝統工芸を肌で感じられる環境に、いま金沢21世紀美術館というアートを肌で感じられる環境が加わったのだと思っています。

その小学生たちが大人となり、やがて自分たちの子供にアートや伝統工芸を語るはずですよ。そのときにぜひ伝えてほしいこと、それは、美術が何も神聖であったり権威的であったりするものではなく、「一人一人の「ここ」と「からだ」で感じるものであるのだ」という基本に他なりません。

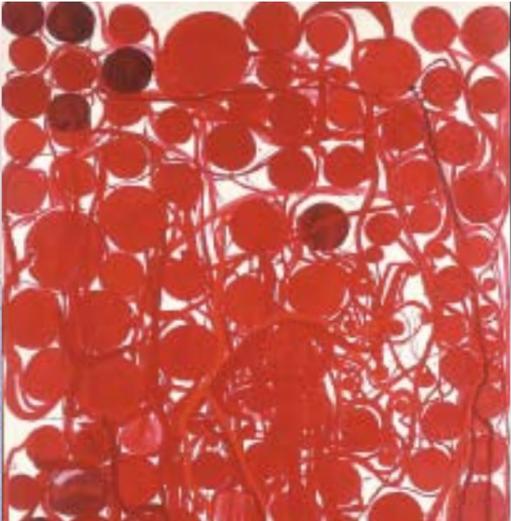
守りよりも攻めが必要なのは、現代アートも伝統工芸も同じ。

もが普段着で美術に親しむことのできる生活空間としての存在でした。ガラス越しに権威的な作品に接するのではなく、生活の一部として美術を見て聞いて触つて、一人一人が感じるままに楽しむ。それも10歳の頃に体験するのがちょうどいいのだと直感的に思っている私としては、金沢の小学生たちに21世紀美術館を、まず体感してもらおうことから始めたのです。

①②写真提供：金沢21世紀美術館



③ガブリエル・オロスコ [ピン=ポンド・テーブル], 1998



④田中 敦子 [Work], 1961

ステキインタビュー 1

伝統を守るとか、伝承するのだとか、 そんなふうに考えたことは ないですね。

重要無形文化財保持者(彫金・人間国宝) **中川 衛 氏**

PROFILE 1947年石川県金沢市生まれ。金沢美術工芸大学産業美術学科卒。74年加賀象嵌の高橋介州氏に師事。数々の受賞を重ね、2004年には重要無形文化財保持者(彫金/人間国宝)に認定。金沢美術工芸大学教授、同大美術工芸研究所長として後進の育成にも尽くしている。日本工芸会参与。



**作品は批評するものではなく、
創造へのヒントにするものだ。**

彫金技法の一つで、種類の異なる金属を嵌め込むのが、象嵌(そうがん)です。この技法そのものの歴史は古く、紀元前数千年にまでさかのぼることが出来ます。そんな歴史を学ぶために、北欧から地中海沿岸までヨーロッパ各国へ何度も出かけたのはもちろん、中近東にまで足をのばし特にトルコには十数回行っています。でもそれらの旅は、あくまでも学術的に象嵌の歴史を学ぶためのものであり、自分の作品のヒントとするためのものではありませんでした。

新たな象嵌を創るためのアイデアというのは、古い象嵌の中にあるのではなく、フィールドの違う絵画であったり彫刻であったり民芸であったり、そして旅の途中にふと接する車窓の景色にありたりするものなのです。



象嵌水指「水舞い」

**技と、使い方と、デザインと、
そしてもう一つ情報だと思っ
た。**
美術館へ出かけるとなると、どうしても作品を鑑賞するのだと身構えがちですが、新たな創造のためのアイデアは隠れていないか、毎日のライフスタイルに生かせるヒントはないだろうか、そんなふうにごく考えながら美術館で時間を過

すと、それは新鮮な気持ちになれます。伝統工芸の世界のキーワードとして「用と美」が良く使われますが、私自身のキーワードを挙げるとすると、技と使い方とデザインと、そして情報になります。例えば使い方ですが昔ながらの床の間に置かれることだけを考えるのではなく、オフィスや応接間、デスクの上でもちゃんと存在感を主張する、そんな象嵌を創るにはどうすればいいのかを常に思考しているのです。

**同じ物は創らないと決めると、
表現も自ずと拡がりを見せる。**

昔ながらのものを創り続けて伝統を守るのだとか、加賀象嵌を伝承するのだとか、そんなふうにごく考えたことはありません。作品が悪いものであればごく自然に消えていき、良いものだけがちゃんと残っていく。伝統とはそういうものなのではないでしょうか。

いわゆる人間国宝と呼ばれるようになった私ですが、いや、だからこそ言うべきかも知れませんが、もつともつと自分の表現へのこだわりを深めたいとの思いを強くしています。あの作品が良かったから同じものをぜひ作って下さいと、そんなご依頼があったときなどは嬉しいのですが、でも同じ物を創り続けて安穩としていたくはないのです。

たぶん、金沢の伝統工芸の先達たちもきつと同じような思いを抱いていたからこそ、こうして今も加賀百万石の伝統が息づき続けているのではないのでしょうか。(談)

象嵌花器「島海道」



象嵌銀花器「夕霞(せきせい)」





FOREIGNER'S EYE

外国の人たちは、

どう見て、どう感じているんだろう!?

金沢の伝統工芸。



作っている人が少ないと聞くと、
一つ一つの手づくり感が、
ますます優しく
感じられますね。

ケイト・パーソンズさん

オーストラリア出身。ハイスクール時代に富山県へ留学。その後、2002年から石川県で国際交流関係の仕事に従事。現在は、北陸大学国際交流センターの職員として働いています。

金沢は伝統のある街だと、

工芸が息づく街だと、誰もが認めています。

でも、だからと言って、

その伝統をただ守っているのでは、

なんとも金沢らしくない!との思いもまた、

誰もが感じているところでしょう。

日本らしさ、金沢らしさ、伝統工芸らしさ。

そんな「らしさ」への思いを、

外国の人たちは、

どんなふう感じているのでしょうか。

金沢という地にこだわりながら、

金沢というブランドを世界に発信してこそ、

金沢の伝統工芸であることを、

いま改めて考えてみたいものです。



誇りたいのは、
希少であること
ではなく、
手わざの温もり。

いま金沢で、加賀毛針を作っているのはもう2軒だけ。細かい手先の仕事をこなす職人も少なくなってきました。でも、その釣具としての機能だけではなく、芸術的なまでの美しさが、いまユーザーやアクセサリにアレンジされ注目を集めています。

「オーストラリアにも細かい手仕事の民芸品はありますが、手づくり感がなんともステキですよね」と言うケイトさん。加賀でまりや水引、和傘などにもまた、職人たちの手の温もりをしっかりと感じとっているようでした。



匠の技



出身は仙台市。目細家の第20代当主となるご主人との結婚を機に、毛針作りに移るようになった。

3年目くらいから毛針を作っているのだと実感できるようになって今年はまだ6年目。80歳で現役の大先輩もいる世界です。まだまだ修業の身だとのこと。毛針作りをサリを手がけているご主人との二人三脚で、まだまだ技を磨きたいと願う目細さんです。

美しいものへの憧れ、それは国籍とか民族とかとは、関係ないんですよ。



ツエルボヴァー・モニカさん
チェコ共和国出身。4年前のホームステイ経験で日本のファンになり、再び2004年の秋から1年間の予定で来日。金沢大学の留学生として日本語と日本文化を学んでいます。

加賀友禅とは、キモノというキャンバスに描かれた、まさに絵画なんだ。

加賀友禅があり京友禅があり、その友禅というブランドは、確かに大きな価値を持っているのですが、その創始者とされる宮崎友禅齋の正確な生涯は、幸か不幸か明らかではありません。
京友禅の図案調に対して、絵画調であると言われる加賀友禅の写実性は、もちろん今も変わることなく息づいています。えんじ、黄土、藍、草、古代紫の加賀五彩を基調にして描かれる花鳥風月や山水絵。そこに作家たちが求めたのは何なのでしょう。か。
加賀友禅の技の粋を集め染めあげられるものに、伝統的な金沢の婚礼で用いられる「花嫁のれん」があります。まさに加賀友禅の作家たちが視野に入れているのは、一枚の友禅が掲げる幸せの絵図なのかも知れません。「わずか一年の留学体験ですが、その卒業のときには、みんなで加賀友禅を着ようね」と話しているんですよとモニカさん。加賀友禅ならではの「虫喰い」や、「先ばかし」といった技法を理解するのはまだ先のことのようにですが、キモノが持つ日本の美に対しては絶賛を惜しむことがありません。



加賀友禅という名のキャンバスに描かれるものがあるとすれば、それは当然ながら金沢の四季を映すことにこだわったものでもあるはず。今までもこれからも、金沢の美を世界に発信するものとしての加賀友禅でありたいものです。



由水 煌人作 訪問着「瓢」(加賀染振興協会)
吉祥文様の一つである瓢(ひさご)を除(かげ)と陽(ひなた)との構成で和様の美の中の立涌取を歪にした構図で創作している。



白坂 幸蔵作 訪問着「菊水」(加賀染振興協会)
菊の花を圖案化し、流水の流れに浮かぶ様を表現している。



匠の技



由水 煌人氏
日本工芸会正会員 加賀友禅伝統工芸士。初代由水十久氏の長男として生まれ、京友禅の人熊国宝・森口華弘氏に師事。昭和52年「日本伝統工芸展」入選をはじめ数々の受賞歴を重ねています。大切にしているのは、女性のしぐさに秘められた着姿の美しさや、作品の中の絵柄が創り出す空間へのこだわり、鋭い感性と観察力を持ち、茶道や日本舞踊等にも通じ、常に独自の友禅を作るといふ永遠のテーマをもつて創作に励んでいます。

僕の知らない時代の九谷と、
いまの九谷焼とでは何が違うのか、
その答えの一つに出会いました。



マイケル・龍也・ケリーさん
アメリカ合衆国出身。辰年生まれということ
で、龍也というミドルネームを持つ日
系2世。陶芸の道で生きて行くことを模索
しながら、現在、金沢美術工芸大学大
院陶磁コースにて陶芸を学んでいます。

暮らしの中でちゃんと使えるのか、
使ってもらえるのか、
使い手側を意識している金沢九谷。



どうでしょう。「九谷焼」というと、
どうしても華麗な色絵の世界をイメ
ージしてしまうのではないでしょ
うか。幾多の窯の歴史を重ねる中で、と
きに海外に渡った九谷の数々もある
のですが、そんな二時期の九谷(再興
九谷/明治・大正期)を目にした外国
人にとってはなおのことです。
マイケルさんも、歴史の中の九谷と
現在の金沢九谷ではどう違うのか、鶴
来の舟岡窯に中田明守さんを訪ねて、
そんな素朴な疑問を向けました。「時
代背景が違うということ。その時代が
生み出すモノがありデザインがある
のだと、その答えは何とも明快です。
緑、黄、赤、紫、紺青。伝統の九谷五
彩を大切にしながらも、九谷らしさ

の一つでもある「色のくすみ」を、ただ
守ることを潔しとはしないとも言
います。明るい緑色を駆使しながら、あ
る意味では「中田明守様式」といった
九谷の世界を創り上げているのです。
暮らしの中で使えそうで使えない
器は作りたくない。定規で引いたよう
な線や絵は描きたくない。そんな中田
明守さんのこだわりを、マイケルさん
も感じ取ったようで、フリーハンドに
よる温もりあふれた筆の運びを、いか
にも興味深そうに指先でなぞります。
そんなフリーハンドの柔らかさそ
のものが、いつの時代も使い手側を意
識しながら、その時代にふさわしい趣
を創り出してきた金沢九谷を、まさ
に象徴するものなのかも知れません。



「黄花 片口鉢」



左:「黄葉 マグカップ」
右:「梅文 マグカップ」



手前から
「黄花 楕円皿」
「フクロウ花生」
「厚測ボール(大)(中)」

匠の技

中田明守氏

●ななあきもり



「中田明守様式」と、その名前では呼ばれ
ていないものの、独自のデザイン世界
を築いています。その根底にあるのは「生
活」(生活)という考え。あくまで暮らしの中
で使っていてこそその器だと考え、まず自分
で使いながらサイズを決めたり、こころを
使い手へ伝えていきます。九谷焼伝統工芸
士、金沢卯辰山工芸工房委員、講師、金沢市
工業展審判員など数多くの要職を兼務して
います。



同じ金箔と言っても、
それぞれ微妙に
色合いが違いますね。
私の髪の色もそうですけど...

マサロヴァー・ズデンカさん
スロヴァキア共和国出身。友だちと一緒に、茶道や書道などの習いに積極的にチャレンジ。2004年の秋から1年間の予定で来日、金沢大学の留学生として日本語を学んでいます。

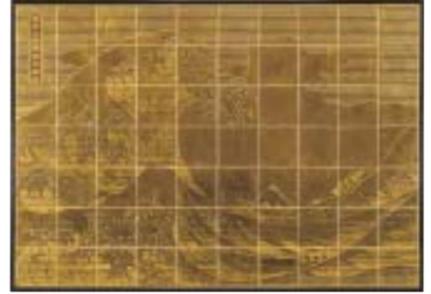
金箔があり銀箔があり、さらにはプラチナ箔もあって、金沢箔の奥は深い。

今もまた「黄金の国・ジパング」というイメージを強くもっている、そんな外国の方も少なくないようです。ある意味では、そんなイメージをずっと支え続けているのが金沢箔なのだと言えます。なにしろ日本国内の金箔の約99%を、その他の銀箔やプラチナ箔などは100%を、ここ金沢で生産しているのですから...

めに使われるのが竹の箸。「箔」という漢字が「竹冠に泊まる」と書くのだと説明されると妙に納得です。「私の髪もブロンドとブラウンの間の微妙な色なんですけど、ひと口に金色や銀色といっても、それぞれ微妙な色合いの違いが本場に馴染ませてくれますね」と、金箔をまぶしたソフトクリームを食べたこともあるというズデンカさん。漆器はもちろん、焼き物やガラス製品に、また屏風や襖に、そして仏壇にも使われているなど、その用途の広さに改めて思いをひろげるとともに、帰国の際のお土産として箔製品を考えているようでした。



左:「ジュエリーボックス」
中:「手鏡」
右:「バビュームボックス」
(いずれも金箔工芸 田じま)



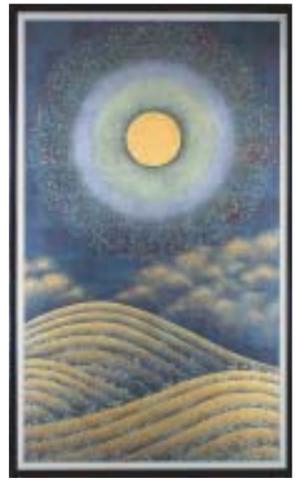
「アート箔<浮世絵>」
(かなざわかたニ)
【製品:製法特許取得済】
独自製法により、わずか0.1ミクロンの純金箔上に艶消と光沢の凹凸を実現。純金のコントラストのみで絵柄を表現。
サイズ:巾150cm×高さ105cm



上:「雅 長角バネルびわ銀」
下:「雅 長角バネルびわ金」
(いずれも箔一本店 箔巧館)
伝統的な柄の中にも斬新さが感じられるバネル。
サイズ:巾30cm×高さ90cm



上:「彩華大皿<パープル>」
下:「彩華酒器セット<パープル>」
(いずれも箔一本店 箔巧館)
高貴な色とされた紫に、銀箔をふんだんに焼き付け、シンプルかつ豪華に見える逸品。



金銀砂子細工 額装「日輪」
(金銀箔工芸 さくだ)
天平年間より受け継がれた「金銀箔砂子細工技法」により描かれ、金銀箔の華麗さの中に繊細で格調高い額装の逸品。サイズ:巾119cm×高さ196cm



「樺・金箔オブジェ」(金銀箔工芸 さくだ)
自然の木の樺に、金箔を施したオブジェ。「和洋空間に和み」をテーマに製作。



「樹脂ポウル ラウンド 墨 L・M・S」
(箔座ひかり蔵)
純金プラチナ箔を大胆にいかし、ドットをモチーフにデザインしたポウル。料理や和菓子などの盛器として、また花器としてなど多様に使える。



匠の技
新木 昭氏

金箔の技法の中で伝統的な縁付(えんづけ)技法を用いて、多種多様な箔の中で最も大きい七寸二分箔を、唯一扱っている伝統工芸士です。
祖父の代から続く箔打商人の家に生まれ、父三郎氏に師事しながら箔打紙を扱う事の難しさを探求。平成13年石川県伝統工芸産業優秀技術者賞を受賞。自分の箔を用いてどの様な作品が創られるのかに思いを馳せながら、常に新しいアイデアをもつて箔打ちに励んでいます。

楽器が「奏でてこそ」の
ものであるように、
漆器もまた、
暮らしを「彩ってこそ」の
ものです。



ルドヴィート・カンタさん
スロヴァキア共和国出身。国際的なチェリスト。1990年にオーケストラ・アンサンブル金沢の首席チェロ奏者に就任。輪島生まれの奥様と結婚し石川県に在住。国内外で活発な演奏活動を展開しています。

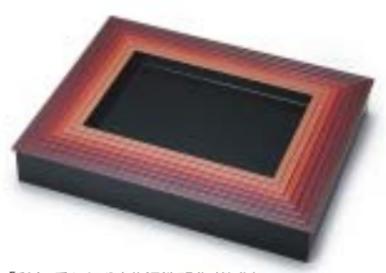
瀟洒だとか、華麗だとか、そんな昔ながらのアイデンティティに、ただ、とどまっではない。

金沢漆器の歴史をさかのぼってみると、確かに他の産地とは趣を異にしているところがあります。始まりは三代藩主利常が、京都から五十嵐道甫という蒔絵の名工を招いたこと。藩主のための調度品づくりはもちろぬ、武家にふさわしい作風を模索しながら、華麗で繊細な加賀蒔絵が百万石の地に根付いたものなのです。

そんな伝統を大切にしながらも、いま、暮らしの中の漆器を意識した新たな造形や、その現代的なデザインワークで、現代生活にも受け入れられている金沢漆器。日常使いの漆器として、その使用シーンをますます広げているのも、茶の湯文化とともに歩み培った、もてなしの心を脈々と息づかせているからこそなのではないでしょうか。「チエロというのは、人の声を感じさせる楽器だとも言われています。同じような言い方をすれば、漆器というのは、人の肌を感じさせますね」とカンタさんは言います。漆器への思いを強く持っているのは、奥様が輪島生まれということもあるのでしょうが、乾燥させた木地を素材にして、ニスを塗って仕上げるチエロという楽器とイメージが重なるところも、きつとあるのでしょうか。暮らしを彩ってこそその漆器。生活の中で息づいてこそその漆器。そんな思いをこれからも大切にしていきたいものです。



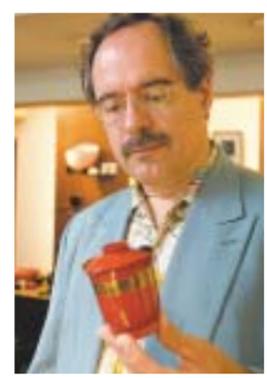
「荒筋 春秋蒔絵 吸物椀」
宮崎博彰作(能作)
筋を施した無地の蓋を開けたときに、桜と紅葉の豪華な蒔絵を目にする驚き、そんな贅を楽しむことのできる吸物椀です。



「彩色 重ね組盆」藤沢浩明作(能作)
現代的なグラデーションを表現コンセプトに色漆の世界を探索。パーティやレセプションに映える重ね組盆です。1999年「国際漆デザイン展'99石川」入賞。



「曙 扇面福輪銘々皿」藤沢浩明作(能作)
金沢漆器に特徴的な技法の一つに「鏡淵」があります。扇型の淵に錦を施した銘々皿です。



「朱 菊蒔絵 長手小箱」横山一栄作
(金沢漆器商工業協同組合)
青貝を使った螺鈿をポイントにしなが、女性らしい繊細な線で菊を描き出した長手小箱です。2005年「金沢漆器組合展」金沢市長賞受賞。



「宝尽し蒔絵 中棗」塚本祥甫作(能作)
漆黒の空間のなかに縁起の良い図柄がバランスよく配され、すっきりと上品な仕上がりの中棗です。



匠の技
藤沢浩明氏

漆職人である父(喜男氏)に師事。当初金沢の漆芸家たちの作品を目にし、その気品の高さと伝統工芸自体の歴史の深さを感じた。その後研鑽を積み、今も求め続けている。技術的には難しくても、気品を感じさせる塗り漆器はやはり海外の著名な彫刻家アンソニー・カプーア氏によるオフジェの塗りを担当したり、1800年代の貴重なピアノの塗りの修復に携わったりとその活躍の場を世界に拡げています。

綺麗！と感激したすぐ後に、
難しそう！大変そう！
という思いが、
次々に浮かびます。

ケーティ・ミクドーナさん

カナダ出身。子供の頃にお母さんから習ったキルティング、パッチワークを今も趣味として続けています。ご主人の仕事の関係で金沢に在住。現在は、北陸学院短大で英語を教えています。



針を運ぶ指先、

その動きにも芸術性を感じさせる、
加賀の妙。

フランス、インド、スウェーデン、中国などなど、その国の名前を冠した刺繍が古来より世界各国にあります。

そんななかで加賀繡(かがぬい)の特色はといえば、やはり金糸、銀糸をはじめとした、色を数えるなら千色は超えると言われる、多様な色糸つかいの妙ではないでしょうか。さらには2色の糸をより合わせて使う「ぼかし繡」という技法もあって、色数にはまさに限りがありません。「世の中にはブランドだけが一人歩きして、見ただけでは何故こんなに値段が高いのか分からないものも多いけれど、この加賀繡は、ひと目見ただけで、その難しさと大変さと、

そして何より手仕事にかけられた、長い時の流れを感じさせてくれますね」と、ケーティさんが嬉しいことを言ってくれました。

子供の頃にお母さんから教わったパッチワークを、今も楽しんでいるというケーティさん。加賀繡の針の運びが、上からは右手で下からは左手と、両方の手が使われていることが不思議そうです。

いま呉服や帯だけではなく、袱紗(ふくさ)やポーチ、匂い袋などなど、まさに多彩な品々に用いられている加賀繡。それらの作品そのものももちろんですが、針を運ぶ指先の動きそのものもまた、見惚れるまでに繊細な芸術なのだとも言えそうです。



左:「ミニバッグ」
ぼかし繡の紬地バッグで非常に軽く気軽に使える。
右:「パーティーバッグ」
絹糸に光るビーズをあしらっており、ちょっとゴージャスなパーティーバッグ(いずれも小林刺繍舗)



左:「袋帯 姫」
右:「袋帯 翁に花菱」
(いずれもぬいの今井)
「着物一枚に帯三本」と言われるように装いの要となり、着姿の美しさと豪華な雰囲気により一層高まる。



上:「組紐巾着<レッド・ブラック・グレー>」
留袖や袋帯等に用いられる格調の高い文様である組紐と房の刺繍のプチバッグ。
下:「花丸かんざし<パープル・ネイビー・ライトグリーン・レッド>」
金工作家上田祐子氏とのコラボレーション。
加賀花丸紋を刺繍。素材はシルクとシルバーで片面は透し彫りになっている。(いずれもギャラリー 蘭鳥)

「フォーマルバッグ」(ぬいの今井)
扇面に花菱をあしらっており、さりげない豪華さと気品をもたらし、持つことで華やかな和装をよりいっそう引き立てる。

匠の技

友田 佐知子氏 ©友田 佐知子



子供の振袖に自分の手で加賀繡を思い立ち、今井フクエ先生に教えてもらうようになったから、やがて20年になつてしまっています。
約15種はあるという繡い方そのものももちろん覚えはしましたが、それらの技の組合せや糸の使い方が、とてまていって学ぶことは出来ないかと感じます。加賀繡伝統工芸士。先生と同じように生涯現役で仕事したいと願っている友田佐知子です。

タイに仏壇はありませんが、
ここに行むだけで厳かな気持ちになるのは、
なんかスゴイですね。



キティヨドム・パーサコーンさん

タイ出身。8年前に金沢大学に留学し、すでに博士課程を終え工学博士。金沢暮らしの間に覚えた尺八を楽しみながら、今も金沢大学の助手として土木工学の研究を続けています。

やはり問いたいたいののは、宗派や寸法を超えたところでの、確かな工芸美。

木地があり、塗りがあり、金具があり、時絵があり、彫刻があり...まさに仏壇というのは総合芸術なのだと言葉を象徴するような仏壇の一つをお持ちの方を、パーサコーンさんとも訪ねました。

白山市の米岡さんのお宅には、銭屋五兵衛の仏壇が伝え残されているのです。存知のように、銭屋五兵衛は江戸時代後期に「海百万石」とも称された豪商であり、その仏壇を米岡さんの3代前の当主が手に入れられたもので、これには「加賀の平賀源内」とも呼ばれ、からくり師として名を知られた中村弁吉(通称 大野弁吉)の手による彫刻も施されており、学術的にも大いに注目されている貴重な仏壇です。

国民の9割以上が仏教徒と言われるタイ出身のパーサコーンさん。タイには仏壇はありませんが、お寺にお参りするときは線香とロウソクと、そして金箔を持つて行き、お寺の仏像に金箔を張り付ける風習があるとのことです。

同じ仏教国と言っても全く文化が違うように、石川県内だけを考えると、それぞれ地名を冠した仏壇がい

くつかあります。でもその中でこそ、金沢仏壇でなければならぬというこだわりを大切に、トータルな工芸美を創り続けた、ものです。



「銭屋五兵衛の仏壇<300代>」(米岡家所蔵)
1831年頃、当時の豪商銭屋五兵衛が、彫刻を中村弁吉に、堆黒は湊谷村次郎に、塗師は市右エ門といふ最高の名工に命じて作らせたものである。約170年前に作られながらもその姿を現代に堂々と留める姿はまさに驚きで、仏壇というより、もはや芸術品と呼ぶにふさわしい作品。(W157cm×H250cm×D110cm)



「大賀三号<70代>」(金沢仏壇商工業協同組合)
加賀藩御細工所の流れを組む金沢仏壇七職の技術の復興と後継者育成のために組合が開発に取り組んだ。デザインは浄土真宗以外の宗派にもマッチするよう研究している。(W67.5cm×H164cm×D59.7cm)

匠の技



平岡孝夫氏
ひのおか たかお

金沢仏壇の宮殿づくりは、匠の技術の高さに憧れ、池田純正氏に師事。軒反り(のきそり)など細かな部分から全体的な姿・形までにごたわる大切さを学んだと言います。宮殿部門の伝統工芸士です。
材料としての木々を、一目見たときに木の反りを瞬時に計算し、宮殿のどの部分に使用するかを判断。職人の心がこもった仏壇を作るため、宮殿作りにおいて、さらに厳しい気持ちで取り組んでいると言います。



加賀友禅

1 加賀友禅伝統産業会館
〒920-0932 金沢市小將町8-8
☎076-224-5511
http://www.kagayuzen.or.jp/
E-mail:info@kagayuzen.or.jp



加賀友禅伝統産業会館

金沢九谷

- 2 片岡光山堂
〒920-0936 金沢市兼六町2-1
☎076-221-1291
http://shop-kanazawa.jp/shop.php?shp=151&cald=&calm=w&ml=35
- 3 鏡木商舗
〒920-0865 金沢市長町1-3-16
☎076-221-6666
http://www.kaburaki.jp/
E-mail:kaburaki@basil.ocn.ne.jp
- 4 九谷巴商会
〒920-0936 金沢市兼六町2-13
☎076-231-0474
http://shop-kanazawa.jp/shop.php?shp=146&cald=&calm=w&ml=35
E-mail:akira23@guitar.ocn.ne.jp
- 5 九谷焼長寿堂
〒920-0961 金沢市香林坊2-4-5
☎076-221-1822
http://www.chojudo.com/
E-mail:honten@chojudo.com
- 6 九谷焼諸江屋
〒920-0981 金沢市片町1-3-22
☎076-263-7331
http://www.moroeya.com/
E-mail:kutani@moroeya.com

金沢金箔

- 12 (株) 今井金箔
〒920-0968 金沢市幸町7-3
☎076-223-8989
http://www.kinpaku.co.jp/
- 13 かなざわかた二
〒920-0902 金沢市尾張町2-16-80
☎076-263-6111
http://www.k-katani.com/
E-mail:office@katani.co.jp
- 14 (株) 金銀箔工芸さくた
〒920-0831 金沢市東山1-3-27
☎076-251-6777
http://www.goldleaf-sakuda.jp/
E-mail:kinpaku@goldleaf-sakuda.jp
- 15 金箔工芸 田じま
〒920-0855 金沢市武蔵町11-1 2F
☎076-263-0221
http://www.tajima-kinpaku.com
E-mail:info@tajima-kinpaku.co.jp
- 16 (株) 箔一本店 箔巧館
〒921-8061 金沢市森戸2-1-1
☎076-240-0891
http://www.hakuichi.co.jp/
E-mail:info@hakuichi.co.jp
- 17 箔座ひかり蔵
〒920-0831 金沢市東山1-13-18
☎076-251-8930
http://www.hakuza.co.jp/
E-mail:hikarigura@hakuza.co.jp



箔座ひかり蔵

金沢漆器

- 18 赤地漆器店
〒920-0805 金沢市小金山町12-2
☎076-252-8939
- 19 (株) 石田漆器店
〒920-0981 金沢市片町1-7-21
☎076-261-2364
http://www.3.nsknet.or.jp/~ishida/
E-mail:ishida@po3.nsknet.or.jp
- 20 (株) 和幸
〒921-8163 金沢市横川7-43
☎076-247-4455

7 黒龍堂
〒920-0853 金沢市本町1-5-3
リファール1F
☎076-221-2039
http://www.kokuryudo.com/
E-mail:kokuryudo.com

8 順風堂
〒920-0904 金沢市下近江町40
☎076-231-2700
http://www.kanazawa-cci.or.jp/area/shop/3/promote.html

9 野村右衛門堂
〒920-0936 金沢市兼六町2-3
☎076-231-5234
http://shop-kanazawa.jp/shop.php?shp=139&cald=&calm=w&ml=35

10 北山堂
〒920-0962 金沢市広坂1-2-33
☎076-231-5288
http://www.hokusando.co.jp/
E-mail:office@hokusando.co.jp



かなざわかた二



(株) 金銀箔工芸さくた



金箔工芸 田じま



(株) 箔一本店 箔巧館

21 (株) 能作
〒920-0962 金沢市広坂1-1-60
☎076-263-8121
http://www.kanazawa.gr.jp/nosaku/
E-mail:nosaku@kanazawa.gr.jp



(株) 能作

金沢伝統工芸 ショップガイド

お気に入りの逸品を選ぶ時間をゆっくり、楽しむ。旅の折に訪れたい、伝統工芸のショップガイド。

加賀 繻

- 22 小林刺繻舗
〒921-8015 金沢市東力1-130
☎076-291-5150
http://www.kanazawa1.com/kobayashi/
- 23 めいの今井
〒920-0967 金沢市菊川2-10-12
☎076-231-7271
http://www.kanazawa1.com/imai/
- 24 ギャラリー 蘭鳥(まゆどり)
〒920-0831 金沢市東山1-26-7 (ひがし茶屋街)
☎076-252-2177
http://www.design-ishikawa.jp/gallery/14/yoshigaura.html
- 25 宮越仁美 繻工房
〒921-8034 金沢市泉野町1-12-12
☎076-243-2992



小林刺繻舗



めいの今井



ギャラリー 蘭鳥(まゆどり)

金沢 仏壇

- 26 (株) 池田大佛堂
〒920-0854 金沢市安江町5-7
☎076-222-5550
http://www.kaga-noto.or.jp/Noren01/index1.html
- 27 石今村佛壇店
〒921-8055 金沢市西金沢新町178-1
☎076-249-1366
- 28 卯野屋仏壇店
〒920-0854 金沢市安江町15-44
☎076-263-9570
http://www.shop-kanazawa.jp/shop/onoyabutsudan
E-mail:nobuhikouno@ezweb.ne.jp
- 29 金沢仏壇商工業協同組合
〒920-0855 金沢市武蔵町8-2
☎076-223-4914
http://kanazawa-butsudan.or.jp/
E-mail:info@kanazawa-butsudan.or.jp
- 30 北村仏壇店
〒921-8851 野々市町本町5-4-7
☎076-248-3362
- 31 (株) 澤田仏壇店
〒920-0854 金沢市安江町3-15
☎076-221-2212
http://www.kanazawa-cci.or.jp/shinise/stores/sawada.html
- 32 (株) 清水仏壇店
〒920-0968 金沢市幸町6-5
☎076-222-2861
- 33 竹村仏壇店
〒921-8031 金沢市野町2-6-3 (野町駅前)
☎076-241-6778
http://takemura.ftw.jp/
E-mail:f6intake@amber.plala.or.jp

34 中村仏壇店
〒920-0851 金沢市笠市町1-14
☎076-231-5073

35 塗師岡仏壇店
〒920-0843 金沢市森山2-1-29
☎076-253-2201

36 塗師岡仏壇店
〒921-8031 金沢市野町1-2-36
☎076-241-0795
http://www.kanazawa-cci.or.jp/shinise/stores/nushioka.html

37 はやし仏壇店
〒921-8033 金沢市寺町5-5-17
☎076-241-8690

38 三島仏壇
〒920-0862 金沢市芳青2-4-27
☎076-221-8015

39 森田仏壇店
〒921-8031 金沢市野町3-2-28
☎076-241-1375
http://shop-kanazawa.jp/shop.php?shp=453&cald=&calm=w&ml=16

40 (有) 山田仏具店
〒920-0854 金沢市安江町13-32
☎076-221-2306
http://yamadabutsuguten.co.jp/
E-mail:info@yamadabutsuguten.co.jp

41 柚森仏壇店
〒921-8033 金沢市寺町2-11-40
☎076-241-4571

42 (株) 米永仏壇
〒920-0058 金沢市示野中町1-10
☎076-221-1930
http://w2223.nsk.ne.jp/~yonenaga/



金沢・クラフト広坂

希少伝統工芸

- 43 金沢・クラフト広坂
〒920-0962 金沢市広坂1-1-51
☎076-265-3320
http://www.hokuriku.ne.jp/hirosaka/
E-mail:hirosaka@blue.hokuriku.ne.jp
- 44 上坂 兼六園店
〒920-0936 金沢市兼六町2-15
☎076-264-1511
http://shop-kanazawa.jp/shop.php?shp=1325&cald=&calm=w&ml=24

その他

- 45 大樋焼本家十代長左衛門 大樋美術館
〒920-0911 金沢市橋場町2-17
☎076-221-2397
http://www.hokuriku.ne.jp/ohi/